

〔原著論文〕

## 漢文訓読の返り点に括弧を導入して構造化する試み

松山 巖

### 要 約

漢文の訓読において用いられる返り点は、長年の慣習と伝統の中から生まれてきた実用性に富むものであるが、現代的な観点で見ると必ずしも構造化されておらず、合理性に欠ける面がある。この点を補うため、返り点記号の一種として丸括弧を導入することを提唱する。丸括弧内の文字列は、丸括弧外の文字列との関係においては一文字として扱う。丸括弧の導入により、一二点・上下点などの各種の返り点は不要となり、レ点のみで用が足りる。また、従来の返り点があくまでも文字を訓読する順序を示すに過ぎなかったのに対して、括弧を用いることで構文が捉えやすくなることを示す。

キーワード…漢文、返り点、丸括弧、構造化

### 一、はじめに

コンピュータプログラミングの世界では、構造化プログラミング(structured programming)という用語がある。これは、一九六〇年代後半から七〇年代にかけて、オランダのダイクストラらが提唱したもので、一言で説明するのは難しいが、あえて一言でいえば「プログラムを作成するとき、処理を小さな単位に分解し、階層的な構造となるようにプログラミングすること」である。そして、そのよ

うなプログラムでは、「小さな単位」がどこからどこまでであるかが視覚的に分かりやすく書かれる(例えば、括弧で挟む、字下げする、begin～endで挟むなど)。また、プログラムの流れをコントロールする制御構造として、順構造(シーケンス)、分岐(枝分かれ)、繰り返し(ループ)の三種類を基本制御構造として用いる。また、GOTO文は原則として使用しない。このメリットとして、プログラムの構造が視覚的に捉えやすくなり、アルゴリズムの間違いを減らせること、またプログラム全体を分割することで、多人数で分担してプログラ

所属…通信教育部

受理日 二〇一四年二月五日

ミングを行いやすくなることが挙げられる。

このような構造化に対応していなかったかつてのプログラミング言語（例えばFORTRAN 66）では、条件によって枝分かれするような場合、IF文だけでなく各手続きの末尾にも元に戻るためのGOTO文が必要であった。当然ながらこのジャンプ先を書き間違えたりするとおかしなことになる。プログラムが大規模になればなるほど、GOTO文が多用されているプログラムの流れを追うのは非常にやっかいな作業となり、そのようなプログラムは制御の流れが複雑に絡み合った様子からスパゲッティプログラムと呼ばれる。

さて、漢文の返り点についても、スパゲッティプログラムのアナロジーが成り立つように思われる。今日用いられている様々な返り点は、基本的には「訓読において文字を読んでいく順序を示すための記号」であって、文の内部構造を（直接）示そうとしてはいない。しかし、そのために初学者にとっては時としてかえって分かりにくさを覚える場面がある。特に、甲乙点や天地人点まで用いられている漢文の場合、構造としてはさほど難しくないにもかかわらず、順序を追っているだけで、行きつ戻りつ、混乱の世界に入ってくる。

本稿では、そのような「スパゲッティ漢文」に対する解決策として、「構造化された返り点」について考える。

## 二、訓読と返り点

### (一) 返り点とは

漢文は中国の古典語で書かれた文章である。当初はおそらく、こんなにちの我々が諸外国語に接するときのように、中国語を中国語として読んで理解していたであろうが、やがてこれを日本語（現代から見れば日本語の古文）に翻訳して読んで理解するようになった。ただ、他の外国語と異なるのは、漢字文化そのものが日本に流入していた点である。日本では、漢字語を原語に近く発音した音読みだけでなく、同じ意味を持つ固有の日本語で読む訓読みも用いて、漢字語は日本語の語彙の一部分を形成するようになった。このメリットを活かして、漢文を翻訳する際にも、英文和訳のように丸ごと訳してしまうのではなく、原文の表記を極力活かし、その文字の周囲に、読み方を示す心覚えとなる送り仮名などを付して読むようになった。また、中国語は英語やドイツ語などと同じく基本的にSVO (I love you. 我愛爾) の語順であり、一方日本語は朝鮮語やモンゴル語などと同じくSOVであるため、読む順序を入れ替える必要が生じる。このため、原文の文字の周囲に、語順を示す記号等を書き込むようになった<sup>2)</sup>。これが返り点である。これらの記号法や読み方は、時代が下がるにつれてある程度統一され、体系的な訓読法となった。

朝鮮やベトナムなど、中国周辺の諸外国においても、訓読に類す

る試みは行われたが、日本ほど体系的なものには育たなかった。<sup>(3)</sup> 例えば現在の韓国（おそらく北朝鮮でも）では、漢文は上から下へ音読み（朝鮮語の漢字音で）し、ところどころに助詞や送り仮名に相当する語を挿入するが、日本語のようにひっくり返って読むようなことはしない。参考書によっては、漢字の横に読む順序が小さくアラビア数字で書かれているものもあるが、それはあくまでも漢文を朝鮮語に翻訳する上での、理解の参考のためであり、読むときは上からひっくり返らずに読む。我が国の訓読法は、それが一つの体系をなすまでに完成しているという点で、他の地域に見られないユニークなものといえよう。

## (2) 現行の返り点の基本的なルール

今日広く用いられ、学校教育でも教えられている返り点は、江戸時代までに用いられていたもの（個人により若干のバリエーションがあった）に基づいて、明治時代に体系化し統一したものである。<sup>(4)</sup> 以下に要点をまとめる。

### 一、レ点

レ点が付された文字は、その直下の文字を読んだ次に読むことを示す。

知<sub>レ</sub>彼知<sub>レ</sub>己、百戦不<sub>レ</sub>殆。<sup>(5)</sup>（彼を知り己を知れば、百戦殆<sub>あや</sub>ふからず。）

連続して使うこともできる。

父母之年、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知也。<sup>(6)</sup>（父母の年は、知らざるべからざるなり。）

### 二、一二点

隣接していない文字へ返る際に用いる。順序としては、何も記号が付いていない文字を読んでいき、「一」の付いた文字に当たったらそれを読み、次に「二」の付いた文字を読む。さらに返る場合は一→二→三→四→…と続けることもできる（名称は一二点のまま）。

A B C D E (順序 A C D E B)

A B C D E F G (順序 B E D F C A G)

### 三、上下点

一二点を挟んで返る際に用いる（レ点でつながれた文字列だけを挟んで返る場合は一二点を用いる）。

この際、挟まれた一二点は、「上」点と「下」点で囲まれる範囲の中で完全に終結していなければならない。

A B C D E F G H I (順序 B D E G H F C I A)

この場合、一→二→三という流れが上↓下の中完全に収まっている。言い換えれば、一二点の返り先が「下」点を飛び越えることような読み方は許されない。

さらに続けたいときは、三文字であれば「中」点を導入して、上↓中↓下とする（上中下点）。

A<sub>下</sub> B C C<sub>レ</sub> D E E<sub>二</sub> F G G<sub>レ</sub> H I I<sub>中</sub> J K K<sub>上</sub> L

(順序 B D C F H G E J K I A L)

四文字以上になる場合は、上中下では足りないなので、次の甲乙丙点を用いる。

#### 四、甲乙丙点

次の二通りの用い方がある。

一、上下点を挟んで返るとき。

二、一二点を挟んで四文字以上返るとき。

関わる文字が二文字の場合は甲↓乙、三文字以上になるときは甲

↓乙↓丙↓丁↓…と最大限一〇文字まで使える。<sup>(6)</sup>

なお、第二の用法で甲乙丙点を使用した後、それを挟んでさらに返り点を打ちたいときは、まだ使っていないなかった上下点(上中下点)を用いる。

#### 五、天地人点

甲乙丙点を挟んでさらに返る際に用いる。二文字の場合は天↓地、三文字の場合は天↓地↓人とする。

「漢文教授二關スル調査報告」には、天地人点まで使用する文として次のような例が挙げられている。<sup>(7)</sup>

使人<sub>人</sub>入<sub>入</sub>籍<sub>籍</sub> 誠<sub>誠</sub>不<sub>不</sub>乙<sub>乙</sub>以下<sub>以下</sub>畜<sub>畜</sub>妻子<sub>妻子</sub>一<sub>一</sub>憂<sub>憂</sub>中<sub>中</sub>飢寒<sub>飢寒</sub>上<sub>上</sub>乱<sub>乱</sub>心<sub>心</sub>、有<sub>有</sub>二<sub>二</sub>

錢財<sub>錢財</sub>一<sub>一</sub>以<sub>以</sub>濟<sub>濟</sub>地<sub>地</sub>醫藥<sub>醫藥</sub>ヲ、

(籍をして誠に妻子を畜ひ飢寒を憂ふるを以て心を乱さず、錢財有りて以て医薬を濟さしめば…)

籍は張籍という人名。これは韓愈の書いた文で、訳すなら、「張籍が妻子の世話や飢え・寒さの心配で心を乱すことがないようにしてくれるなら、そしてまた、彼にお金や財産があつてそれによって医者にかかり薬を買うことができるようにしてくれるならば…」といった意味である。

#### 六、乾坤点

天地人点を挟んでさらに返る際に用いるらしい。<sup>(8)</sup>

#### 七、ハイフン

二字の熟語に返る際に、二点の横に短い縦棒を打つことがある。名称は一定しておらず、文献により「縦棒」「豎点」「ハイフン」「連結符号」などと様々に呼ばれている。かつては漢文に慣れていない人向けの親切な符号とでもいうべきものとして位置づけられており、実際には使われないことも多く、「漢文教授二關スル調査報告」にも含まれていなかったが、今日の教科書では必要な場合は必ず打つてある。

欲<sub>欲</sub>取<sub>取</sub>捨<sub>捨</sub>之<sub>之</sub> 之を取捨せんと欲す  
(昔の書き方 欲<sub>欲</sub>取<sub>取</sub>捨<sub>捨</sub>之<sub>之</sub>)

## (3) 現行の返り点法の問題点

現在用いられている返り点には、必ずしも論理的でないところが見受けられるので、ここではそれらについて論じる。

返り点の非論理性を指摘した数少ない文献の一つとして、古田島は、次の一〜四点を指摘している<sup>9)</sup>。ここではそれに若干追加して指摘したい。

## 一 符号の種類为非論理性

一二点の次が上下点、その次が甲乙点…である必然性がない。天地人の代わりに松竹梅ではいけないのか。要するに、単なる慣習としてこれらの文字列が記号として選ばれたに過ぎない。

## 二 符号の数の非論理性

一二点が必要があれば三・四・五…と無限に続けられるが、上中は三つまで、甲乙丙は十まで（十二支まで続くという説に従えば二十二）、天地人は三つ、乾坤は二つ（元亨利貞点なら四つ）と、全く統一されていない。たまたま採用した文字（例えば十干）に込められている思想が反映されているに過ぎない。

## 三 返り点は足りるのか

一二点を挟んで四文字以上をつないで返るときには、本来の上中下点では足りないので甲乙丙丁を用いることが認められているが、

甲乙点を既に使っている文で、甲乙点を挟んで五文字以上をつないで返る場合、天地人点でも元亨利貞点でも足りないが、どうしたらいいのだろうか。

また、天地人点、さらには乾坤点（元亨利貞点）を挟んで返るときはどうするのか。

## 四 例外措置

イ 動詞が二字以上の場合ハイフンが付くので、例えば「欲取捨之」では、「二が付された文字（取）を読んで、次に三が付された文字（欲）を読む」というルールを破っている。三文字の場合も同様（例：欲奴僕視之 之を奴僕視せんと欲す）。

ロ 一二点では一↓二↓三…とさかのぼっていくのだが、動詞が四字の場合に限って、二より下に三が位置することになっている（例：欲取捨斟酌之 之を取捨斟酌せんと欲す）。

ハ 上下点を使うべき場所で四文字以上つないで返る場合に甲乙点を用いる例（前項三）

以上は返り点を付す作業そのものに関わる、いわば本質的な問題点であるが、このほかに学習上の問題点を若干追加しておく。

## 五 並列関係であるにも関わらず、上下の階層があるように見える

不<sub>下</sub>為「見孫」買<sub>中</sub>美田<sub>上</sub> （見孫の為に美田を買はず）  
西郷隆盛の有名な言葉であるが、冒頭の「不」は「見孫の為に美

田を買ふ」こと全体を否定している。「児孫の為に美田を買ふ」を漢文で書くと、「為<sub>二</sub>児孫<sub>一</sub>買<sub>二</sub>美田<sub>一</sub>」となり、二組の一二点が並立する。ところが、これに「不」を付けると、後半の一二点のみが上中下点に「昇格」する。

返り点はもともと「文字」一つ一つについて、それらをどういう順序で読んでいくか(だけ)を示したものであり、文全体の構造を表そうとしているわけではない。その立場に立つ限り、読む文字を一つ一つ矢印で結んでいったとすれば、「孫↓為」「田↓買↓不」という逆行(下から上へ)のラインが二組存在し、かつ一方が他方の外側に位置しているのであるから、外側のほうには一段階上位の記号を使うのは当然ということになる。しかし、学習者の意識として、SVOの形の文が出てくると、SVOのように点が付されていることが多い以上、返り点を読みながら同時に構文を捉える意識が働くことは否定できないし、また、実際問題としても、返り点に従って一字一字読んでいくより、上から読み下していきながら文の構造を把握し(いわゆる直読直解)、返り点に従った読み方(書き下し文)は必要があれば直せば良い。そのほうが読解に要する時間も短くて済むことが多い。そうであれば、構文を把握しながら読む上で自然さの少ない点を打つことができるのなら、そのほうが望ましいとはいえないか。

#### 六、目的語が一字か二字以上かで記号が変わる

参考書などで重要構文を学ぶ場合、語句を一般的にダッシュや英

字などで示すことがある。例えば、否定と受身から一つずつ例を挙げると、

不<sub>二</sub>—— あるいは 不<sub>二</sub>A<sub>一</sub>  
 為<sub>二</sub>A所<sub>一</sub>—— あるいは 為<sub>二</sub>A所<sub>二</sub>B<sub>一</sub>

といった類である。しかし、実際の文章で用いられる返り点は、当然ながら文中の語の字数によって変化する。

不<sub>レ</sub>減

先即制<sub>レ</sub>人、後即為<sub>二</sub>人所<sub>レ</sub>制。

(先んずれば即ち人を制し、後るれば即ち人の制する所と為る)

このような、一見些細なことでも、初学者にはつまずきの元となる場合もある。

#### 七、その他

一二点、甲乙点、その他は「一↓二(必要ならば↓三…)」「甲↓乙(↓必要ならば丙…)」のように伸びていくのに対し、上下点のみは「上↓中(必要ならば↓下)」ではなく、まず「上↓下」であること。

これは、そのほうが言語感覚として自然(仮に他の返り点にならい「上↓中」で止めるとかえって不自然)だからそうなっているのであり、問題点というほどのことではないかもしれないが、不統一といえは不統一である。

以上、現行の返り点を持つ問題点について七項目挙げた。

これらについて言及した文献は、古田島洋介氏の一連の著作を除きほとんどないが、これはおそらく、もともと返り点は人が目で見て理解しやすくするための便法に過ぎなかったため、さほど問題にならなかったものと考えられる。

例えば、前述のハイフンについても、現在よりも漢文に親しむ期間が多かった往時の人々にとっては、「欲<sub>三</sub>取<sub>三</sub>捨<sub>三</sub>之」と書かれていれば、「取捨」の二文字を見てただちにこれらが熟語であることが目に入り、自然と「之を取捨せんと欲す」と読めたのであろう。また、これを初めとして動詞が二字以上の場合にハイフンを用いた表記が例外的措置として定められているのは、逆にいえば、古代中国語においてはほとんどの動詞が一字であったため、基本的には一字動詞の文のみ対応すれば良く、二文字以上の場合には例外として臨機応変に対応していた結果と考えられる。

しかし、今日の中学・高校のように限られた時間の中で漢文を教えなければならぬ場合、また理詰めでルールを理解して捉え、読み方を会得しようとする傾向がある学習者の場合、現行の返り点法が持つ非論理性が、学びにくさをもたらす要因となるおそれがある。また、返り点を自動処理するコンピュータプログラムを作成する場合、文頭から一字ずつ、漢字・振り仮名・送り仮名・返り点をスキャン（物理的にスキャナとOCRを使うという意味ではなく、一字ずつ読み込んで処理していくという意味で）していくことになるであろうが、返り点の非論理性や例外的な扱いの全てに正しく対応しようとするれば、そのアルゴリズムは非常に複雑なものにならざるを得まい。

返り点の体系を今日の視点から全体として捉えると、厳しい言い方をすれば、ある意味でご都合主義的な面がある。それでこれまでうまくいっていたのは、たまたま運が良かったからであり、現在のルールだけでどんな漢文も絶対に正しく返り点が打てるという保証はない。

なお念のため申し添えるが、返り点は歴史の中で試行錯誤を重ねて少しずつ作り上げられてきたものであり、最初から返り点の記号法の体系を全体的に考えて作ったわけではない。したがって、それが必ずしも論理的でないからといって、いささかもその価値を減じるものではない。むしろこれだけの簡単な記号と仮名を付けるだけで外国語の文章が日本語に化けてしまうという工夫は、日本語と中国語の両者の特性を活かした偉大な発明と呼んでも良いであろう。

### 三、丸括弧の導入

これまでみてきた返り点の問題点の背景として、「あくまでも文字レベルでの順序表示のためのものであり、文字列をまとめるという発想が欠けている（あるいはそれを避けている）こと」があるのではないだろうか。言い換えれば、ある範囲の文字列をまとめて一つの塊のように扱う表記法を考えれば、問題点の一部、特に熟語に関わるハイフンがらみの例外は回避できないだろうか。

また、非論理性をもたらしている背景には、記号に使用している

文字列（「一二三」「上中下」「甲乙丙丁」など）の選択が恣意的であり、かつ数字を除いては有限（上中下なら三、甲乙なら十）だということがある。それならば、より普遍的で、必要がある限りいくらでも追加できる記号体系にできないだろうか。

江戸時代の文献では、返り点のルールが現在よりもゆるやかで、今日では誤りとされる返り点の打ち方も見られる。例えば

登竜門 現在なら登竜門（竜門に登る）

欲師事之 現在なら欲師事之（之に師事せんと欲す）

これらはいずれも、ハイフンでつながれた二文字をあたかも一文字であるかのように扱って、レ点上に返している。今日の用法ではこれらは認められないが、このハイフンの代わりに括弧を導入したら同様の扱いができるのではないか。

そのように考えて、筆者は、返り点を構造化した記号としての丸括弧（以下単に丸括弧と呼ぶ）の導入を提唱してきた。<sup>①②</sup>

### （1）従来の記号を丸括弧に置き換える

まずは、これまで用いられてきた返り点を実際に丸括弧に置き換えてみよう。

#### 一、レ点

これは今までと同様に打つ。

#### 二、一二点

これは、先に読む部分を丸括弧に入れてひとまとまりとして扱い、返り点としてはレ点を使用する。（以下、従来表記↓丸括弧表記、の順で示す）

○<sub>三</sub>□<sub>三</sub>△<sub>三</sub>□<sub>三</sub> ↓ ○<sub>レ</sub>（□<sub>三</sub>）  
百聞不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>一<sub>レ</sub>見 ↓ 百聞不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>（一見）

○<sub>三</sub>□<sub>三</sub>△<sub>三</sub>□<sub>三</sub> ↓  
まず三点の付いた文字○に対して、その前に読む文字全体を括弧に入れると、○<sub>レ</sub>（□<sub>三</sub>△<sub>三</sub>□<sub>三</sub>）となり、さらに括弧の中にある一二点を同様に丸括弧に置き換えると、最終的には

↓ ○<sub>レ</sub>（□<sub>レ</sub>△<sub>レ</sub>□<sub>レ</sub>）となる。

天帝使<sub>三</sub>我長<sub>三</sub>百獸<sub>二</sub>（天帝我をして百獸に長たらしむ） ↓

天帝使<sub>レ</sub>（我長<sub>レ</sub>（百獸））

#### 三、上下点

一二点と同じ要領。

不<sub>下</sub>以<sub>三</sub>千里<sub>三</sub>称<sub>上</sub>也 ↓ 不<sub>レ</sub>（以<sub>レ</sub>（千里）称）也

#### 四、甲乙点、天地人点など

これらも全く同様に、下側の文字列を丸括弧に入れてレ点で返せば良い。



五、ハイフン関係

ハイフンでつながれた熟語を括弧に入れ、下にレ点を置く。なお、一番目の例は比較のために示した、ハイフンのないもの。

欲<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>之 ↓ 欲<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>之 (そのまま)

欲<sub>三</sub>取<sub>二</sub>捨<sub>一</sub>之 ↓ 欲<sub>レ</sub>(取捨)<sub>レ</sub>之

欲<sub>三</sub>奴<sub>二</sub>僕<sub>一</sub>視<sub>レ</sub>之 ↓ 欲<sub>レ</sub>(奴僕視)<sub>レ</sub>之

欲<sub>四</sub>取<sub>二</sub>捨<sub>一</sub>酌<sub>レ</sub>之 ↓ 欲<sub>レ</sub>(取捨斟酌)<sub>レ</sub>之

このように、述語動詞全体が丸括弧に入っており、文の構造が分かりやすくなる。また、従来の方式では、述語動詞の字数によって付される返り点がそれぞれ異なるが、括弧を用いればいずれも同じ構造となっていることが表れている。従来の方法より自然な表記法といえるのではないか。

六、一レ点など

後即為<sub>二</sub>人所<sub>レ</sub>制 ↓ 後即為<sub>レ</sub>(人所制)

これなど、為<sub>レ</sub>〔 〕と為る( )の目的語全体が丸括弧に入っている。構造が分かりやすい。従来の字と字を結ぶだけの記号では、目的語の途中である「所」に一点を打たざるを得ない。

複雑なケースとして、甲乙点まで使う例、および天地人点まで使う例を丸括弧式に置き換えてみよう。

君子<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>人<sub>者</sub>害<sub>レ</sub>人<sub>也</sub>。

(君子は其の人を養ふ所以の者を以て人を害せず) 〓土地は人間を

養うためのものであるはず。君子は土地のために争って人を傷つけるようなことはしない。

↓ 君子不<sub>レ</sub>(以<sub>レ</sub>其(所以)<sub>レ</sub>(養<sub>レ</sub>人)者)害<sub>レ</sub>人。

使<sub>人</sub>入<sub>レ</sub>籍<sub>ヲ</sub>シテ誠<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>畜<sub>レ</sub>妻子<sub>一</sub>憂<sub>中</sub>飢寒<sub>上</sub>乱<sub>レ</sub>心<sub>ヲ</sub>、有<sub>二</sub>錢財<sub>一</sub>以<sub>テ</sub>濟<sub>サ</sub>医薬<sub>ヲ</sub>、

↓ 使<sub>レ</sub>(籍誠不<sub>レ</sub>(以<sub>レ</sub>畜<sub>レ</sub>妻子)憂<sub>レ</sub>(飢寒)<sub>レ</sub>乱<sub>レ</sub>心)、

有<sub>レ</sub>(錢財)以<sub>レ</sub>濟<sub>レ</sub>(医薬)、

これだけ丸括弧が増えると、プログラミング言語LISPを思わせるものがあり、括弧の対応関係を明示してくれる機能を持つテキスタイルイタを使いたくなる。必要があれば、数式のように最も内側から(一)(一)の順序で繰り返すのも一法であろう。

↓ 君子不<sub>レ</sub>(以<sub>レ</sub>其(所以)<sub>レ</sub>(養<sub>レ</sub>人)者)害<sub>レ</sub>人。

↓ 使<sub>レ</sub>(籍誠不<sub>レ</sub>(以<sub>レ</sub>畜<sub>レ</sub>妻子)憂<sub>レ</sub>(飢寒)<sub>レ</sub>乱<sub>レ</sub>心)、

有<sub>レ</sub>(錢財)以<sub>レ</sub>濟<sub>レ</sub>(医薬)、

この要領で、従来の返り点は全てレ点と丸括弧に置き換えることができる。

(2) 丸括弧式の返り点を付けられた漢文の読み方

一、上から下へ順に読んでいく。

二、レ点は従来と同様に、レ点の下の文字(または丸括弧内の文字

列)を先に読み、その後でレ点の上の文字(または丸括弧内の文字列)を読む。

三、したがって、丸括弧で囲まれた文字列は、その部分の外側に対しては、あたかも一文字であるかのように働く。また、返り点としてはレ点のみ使用する。

四、丸括弧の中にさらにレ点や丸括弧がある場合は、今のルールを同様に繰り返す。

### (3) 従来の方式の問題点はどうか

丸括弧式においては、前述の「現行の返り点法の問題点」はどうかみてみよう。

#### 一 符号の種類論非論理性

そもそも丸括弧の一種類しか使っていないので問題にならない。また数式のように小・中・大括弧を用いるとしても、規則的な繰り返しであるので、何重になろうともどの括弧が使われるかは明確である。

#### 二 符号の数の非論理性

レ点と括弧を必要だけ繰り返せば良いので、これも問題にならない。

三 返り点は足りるのか  
同前。

### 四 例外措置

ハイフンが使われる場合には、丸括弧の表記が自然であることは既に見た。また、上下点と甲乙点との優先関係が字数によって前後する問題も、そもそも括弧を統一的に使用しているので生じない。

五 並列関係であるにも関わらず、上下の階層があるように見える

不<sub>下</sub>為<sub>二</sub>兒孫<sub>一</sub>買<sub>中</sub>美田<sub>上</sub> ↓ 不<sub>レ</sub>(為<sub>レ</sub>(兒孫)買<sub>レ</sub>(美田))

「為兒孫」と「買美田」が並列であることが表現され、為<sub>レ</sub>A買<sub>レ</sub>B(Aの為にBを買ふ)という関係がかえって視覚的に捉えやすくなる。

六、目的語が一文字か二文字以上かで記号が変わる

一文字ならレ点のみ。二文字以上ならば下の文字列を丸括弧に入れるが、レ点そのものはレ点のまま。従来のようにレ点が一二点になつたり上下点になつたりすることはない。

七、その他

「二(三…:)」上(中)下「甲乙(丙丁…:)」天地(人)」と、上下点のみ省かれる場所が違うという問題であったが、そもそもこのような(意味のある)文字を記号として使わないので、この問題も生じない。

### (4) 丸括弧式の長所・短所と利用

長所としては、何といっても、右にみたように、従来の返り点が

持つ非論理的な問題点が全て解決され、矛盾なく統一的に表記できることが挙げられる。

また、丸括弧による表記は、英文解釈において文の一部分を句や節といったひとまとまりの塊として扱い、目的語や修飾語などといった文の成分として捉える作業に類似している面がある。したがって構文が見やすくなる。

一方で短所もある。従来用いられてきた返り点は、これはこれで我が国の一つの文化として成熟しているものであり、また実際問題として現存の漢文の文献は全て（記号が付いているならば）この方式が用いられているわけであるから、たとえ論理性に難があるろうと学習者はまずそれに習熟する必要がある。学習者があまり漢文に習熟していない場合、丸括弧式を従来式と併せて説明すると、かえって学習に混乱を来すおそれがある。

したがって、この方式を漢文教育に導入しようとするならば、学習者が混乱しないよう、指導法についてさらなる検討が必要である。まずは、教授者が頭の中で（必要に応じて）丸括弧式に変換するだけでも、漢文の本文を理解する上での助けになるであろう。その上で、理解の早い学習者や、理詰めで返り点を理解しようとする傾向のある学習者に対しては、実際に丸括弧式を用いて説明しても良いであろう。<sup>(13)</sup>

他に、漢文文献の電子テキスト化や、電子化された漢文の自動読み下し文化などの方面にも資するところがあると思われるが、それらは今後の課題としたい。

## 注

- (1) 日経パソコン『日経パソコンデジタル・IT用語事典』四七四頁。
- (2) レ点は十二世紀頃から用いられるようになった。当初は漢字の中央に記され、形もVの字を曲線にしたようなものであったが、十四世紀頃から徐々に左方向に移動し、十六世紀末には今日のように左に寄せて「レ」の形で記すようになった。また、一二点は平安時代から、上下点は平安時代後半から、甲乙丙点は鎌倉時代以降、それぞれ用いられるようになった。（沖村卓也『漢文資料を読む』八頁）
- (3) 例えば金文京『漢文と東アジア』参照。
- (4) 「漢文教授二關スル調査報告」中「返點法」の項。  
「返點ハ顛讀ヲ容易ナラシムル爲ニ施スモノトス其ノ符號左ノ如シ  
(イ) レ（れ點）  
(ロ) 一二三等  
(ハ) 上下又上中下  
(ニ) 甲乙丙丁等  
(ホ) 天地又天地人」
- (5) 本稿では、返り点は全て「上の文字に付されている」として扱う。かつては、一二点・上下点等は今日と同様に上の文字の左下に、一方レ点は次の文字の左上に付されるのが一般的で、今日でもそれを妥当とする意見もある（例えば原田種成『私の漢文講義』四一頁）が、本稿では今日の教科書等における一般的な印刷慣行に従い、レ点も上の文字の左下に付しているとみることとする。
- (6) 十干が終わったら十二支（子丑寅…）につなげることで、両者を合わせ二二文字まで返れるとする説もあるが（古田島洋介『これならわかる返り点』三五頁）、実際問題としてはまず使われないのであろう。
- (7) ただし原文には返り点のみが付けられていたので、志村和久『入試によく出る漢文早わかり』を参考に振り仮名・送り仮名を補った。
- (8) 伊藤丈『仏教漢文入門』六八頁。ただし同書には乾坤点の実例は挙

がっていない。なお、古田島洋介『これならわかる返り点』では、乾坤点と同様の用い方をする「元亨利貞点」というものを「どこぞで見かけた記憶がある」としているが、こちらにも残念ながら実例は挙がっていない。また前掲注4の通り、「漢文教授二關スル調査報告」には天地人点を超える返り点は規定されていない。

(9) 一〜四は古田島洋介『これならわかる返り点』の記述を要約・再構成し説明を適宜補った。五〜七は筆者。

(10) 例はいずれも古田島洋介『これならわかる返り点』五八〜五九頁による。

(11) 返り点を構造化した記号としての丸括弧を導入したのがいつごろだったか、記憶は定かではないが、遅くとも一九九五年には浪人生に對してこれを使用して指導していた。なお、教材として実際に文字になっているのは、東京都練馬区所在の私立富士見高校二年竹組において二〇〇〇年三月一日に行った授業のプリントが最初である。

(12) 従来の返り点で表現できる読みの順序が全て丸括弧で表現できるかどうかを証明するのは、数学の問題として興味深いものがあるが、ここではそこまで立ち入らない。ここでは帰納的に明らかであろうとのみ述べておく。

(13) 前述(注11)の浪人生は、英語を非常に得意としていたので、必要に応じ類似した英語の構文や表現と比較することで、学習の理解が深まったようだった。またプログラミングの素養もあったことが幸いしてか、丸括弧を用いた説明もすぐに受け入れてなじむことができ、これも理解を深めるのに役立ったようであった。

## 参考文献

\*「漢文教授二關スル調査報告」『官報』第八六三〇号、明治四五「一九二二」年三月二九日、一五―一九頁

\*伊藤丈『仏教漢文入門』大蔵出版、一九九五

\*沖村卓也(編著)、斉藤文俊・山本真吾(著)『漢文資料を読む』日本語ライブラリー、朝倉書店、二〇一三

\*金文京『漢文と東アジア——訓読の文化圏』岩波新書二二六二、岩波書店、二〇一〇

\*古田島洋介『これならわかる返り点——入門から応用まで』新典社新書七五、新典社、二〇〇九

\*志村和久『入試によく出る漢文早わかり』学燈社、一九八九

\*日経パソコン編『日経パソコンデジタル・IT用語事典』日経B P社、二〇一三

\*原田種成『私の漢文講義』大修館書店、一九九五

## Attempt to Structurize Kaeri-ten in Kanbun: Introduction of Parentheses as a new Kaeri-ten

Iwao MATSUYAMA

### Abstract

*Kaeriten* system—the traditional system of *kanbun* annotation in which Classical Chinese writing is read in Classical Japanese—has some faults in the point of modern logical view. The faults are examined and the author proposes a new annotation system in which parentheses are introduced. This paper shows that in the traditional *kaeriten* marks only *re-tens* are sufficient if we introduce the new parentheses system. Applying to the *kanbun* education in Japanese school classes is also considered.

**Keywords:** *Kanbun*, *kaeriten*, parentheses, structurization